



**Data**

監督：キム・ジウン

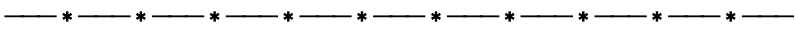
出演：ソン・ガンホ／コン・ユ／ハ  
ン・ジミン／鶴見辰吾／オ  
ム・テグ／シン・ソンロク／  
ソ・ヨンジュ／チェ・ユファ  
／フォスター・バーデン／パ  
ク・ヒスン／イ・ビョンホン

## 👁️👁️ みどころ

『暗殺』（15年）は日本統治下の1930年代だったが、本作は1920年代。そして『暗殺』でも主要人物の一人だった「二重スパイ」が本作では主演に。舞台も京城（現在のソウル）と上海だし、独立運動団体、義烈団による朝鮮総督府の要人暗殺がメインだから、両者を比較対照すれば一層面白い。

ドイツで「ナチスもの」「ヒトラーもの」、そして「ホロコーストもの」「アイヒマンもの」が続出しているのと同じように、韓国でもこの手の反日・抗日ものが次々と。その頂点が近々公開予定の『軍艦島』（17年）だが、日中関係、日韓関係が微妙な中、そんな映画状況をどう考えればいいのか？

それはそれとして、中盤の「列車モノ」の「密室モノ」としての面白さを含めて、本作全体の面白さと演出の冴えに拍手！他愛もない「純愛モノ」が続出している邦画よりこっちの方が断然面白いから、日本人の映画関係者は1920年代、30年代以上に今、頑張らなくっちゃ・・・。



## ■□■ドイツでも韓国でも次々とこんな映画が！■□■

ドイツでは『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマルーム32』215頁参照）の公開前後から、「ナチスもの」と「ヒトラーもの」、そして、「ホロコーストもの」と「アイヒマンもの」が次々と公開されている。中でも、近時の『帰ってきたヒトラー』（15年）（『シネマルーム38』155頁参照）や『手紙は憶えている』（15年）（『シネマルーム39』83頁参照）、そして、10月29日に観た『ブルーム・オブ・イエスタディ』（16年）は、設定をかなりひねった面白い着想の映画だった。

それと同じように、韓国では今、日本統治時代（日本によって韓国が植民地にされていた1910年～1945年）における反日活動家たちの活躍を描いた映画が、チェ・ドンファン監督の『暗殺』（15年）（『シネマルーム38』176頁参照）の大ヒット以降次々と公開されている。その最大の問題作は、これから日本でも公開される予定のリュ・スンワン監督の『軍艦島』（17年）だが、その反日の描き方は過大過ぎると共に、史実に基づいていないとの批判も強いから、自分自身の目でしっかり確認しなくちゃ。また、私は観ていないが、ホ・ジノ監督の『ラスト・プリンセス 大韓帝国の最後の皇女』（16年）やイ・ジュニク監督の『朴烈』（17年）もそうらしい。さらに、パク・チャヌク監督の『お嬢さん』（16年）は、激しいドンパチ戦はないものの、1939年の日本統治下、朝鮮人でありながら身も心も日本人になりたいと願う中年男の官能的で耽美的、SM的で倒錯的なテイストを特徴とする面白い映画だった（『シネマルーム39』189頁参照）。

歴代第7位となる1270万人もの観客動員を果たした『暗殺』は、1933年11月7日に強行された、爆弾による朝鮮総督府司令官の暗殺をハイライトとする暗殺団たちの血沸き肉躍るドラマで、カッコいい女スパイがウエディングドレス姿で血に染まりながら拳銃をぶっ放すシーンがメチャカッコよかったが、さて、本作は？

## ■本作の時代は1920年代。テーマ、舞台、主人公は？■

本作は『暗殺』とほぼ同じ系譜の映画で、1920年代の日本統治下における独立運動団体、義烈団と日本警察との対決（日本統治への抵抗、反抗＝爆破、暗殺）を描くもの。『二重スパイ』（03年）ではタイトル通り、ハン・ソッキュ演ずる二重スパイの悲哀が描かれていた（『シネマルーム3』74頁参照）し、『インファナル・アフェア』3部作でも潜入捜査官とマフィアの二重スパイが主人公にされていた（『シネマルーム3』79頁、『シネマルーム5』336頁、『シネマルーム7』223頁参照）。それは『暗殺』も同じで、二重スパイが重要な意味を持つことになる。

それに対して、本作の主人公は、朝鮮人でありながら朝鮮人の情報を売ることによって朝鮮総督府の警部にまで出世しているイ・ジョンチュル（ソン・ガンホ）。ジョンチュルが何故そんな立場を選択しているのかは、導入部で警察の大部隊を率いる彼が義烈団のリーダーであるキム・ジャンオク（パク・ヒスン）を追い詰める攻防戦の中で明らかとなる。つまり、ジョンチュルは旧友であるジャンオクに武力による抵抗が無駄なことを何とかわからせようと最後まで説得を試みるわけだが、結果は「売国奴！」と罵られ、ジャンオクは「大韓民国万歳！」と叫びながら自決することに・・・。

ジョンチュルの上司であるヒガシ部長（鶴見辰吾）はジャンオクの生け捕りに失敗したことに不満だが、仕方なし。しかし、ジョンチュルを信頼する一方、ジョンチュルへの疑いも捨て切れないヒガシは、以降ハシモト（オム・テグ）と情報を共有しながら共同作業をするように命じたから、そのココロは・・・？そもそも、スパイ活動、諜報活動なんて

ものは秘密主義が当然なのに、互いの信頼関係もないまま、そして人間的には本質的に敵対しあう、日本人のハシモトと朝鮮人のジョンチュルをペアにしたのは如何なもの・・・？

## ■□■義烈団の闘士たちの人物像は？その任務は？■□■

ヒガン部長の命令でジョンチュルが接触を開始したのは、義烈団の生き残りのリーダーであるキム・ウジン（コン・ユ）。彼は京城（現在のソウル）で写真館を営んでいたが、その裏の顔は？そして、そこに入入りしている美女ヨン・ゲスン（ハン・ジミン）の裏の顔は？日本の警察としては、京城には入らず上海で義烈団の指揮を執っている団長のチョン・チェサン（イ・ビョンホン）を逮捕したいわけだが、チェサンに関する情報をどうやって集めればいいのか？

本作中盤ではジョンチュルが警部という立場を明らかにして堂々とウジンに近づき、互いに飲み明かしながら「友人」になっていくストーリーが描かれる。飲み会終了時にはウジンがジョンチュルのことを、阪神タイガースの金本知憲監督の呼び名と同じ「アニキ」と呼ぶほどまでに深まったが、もちろんこれは互いに嘘八百の駆け引き。去る11月9日に行われたトランプ大統領と習近平国家主席の「米中首脳会談」みたいなもの(?)だ。

ウジンについて日本の警察が握ってる情報はほんのわずか。それを深めるには、秘書のような、恋人のようなヨン・ゲスンの身柄を確保すれば一番いいのだが、そのためにはどの作戦がベター？内部でのライバルになってしまったジョンチュルとハシモトの連携がうまくいかないこともあって、中盤の展開はウジン側が有利、ジョンチュルとハシモト側に不利な展開だが、さて、ヒガンの次なる指示は？そして、ジョンチュルの次なる作戦は・・・？

## ■□■舞台は京城から「世界の摩天楼」上海へ！■□■

『暗殺』ではハワイピストルと呼ばれるマカロニ・ウエスタン風の雰囲気を持った奇妙な殺し屋が登場したが、その舞台は「世界の摩天楼」と呼ばれた中国の上海だった。日本統治下の京城では危険すぎるため、韓国の反日活動家たちの拠点には西欧列強の租界地がある上海に置かれたわけだ。それと同じように、本作中盤、ヒガン部長やジョンチュルたちの攻勢が強まる中、ウジンたちもやむなく京城の拠点を引き払って上海に逃れていたが、そこには義烈団の団長チェサンも潜んでいた。ところが、今やヒガシやジョンチュルたちの追及の手は上海にまで及んできたから、ウジンもゲスンもチェサンに対して拠点をさらに北の満州に移すよう進言したのは当然だ。

ところが、あくまで京城に爆弾を持ち込んで要人の暗殺を狙っているチェサンは断固それを拒否。そればかりか、逆に彼はジョンチュルを「二重スパイ」として義烈団側に取り込むことを提案。そのため、某日、某所で、何とジョンチュルとウジン、そしてチェサンの3人が飲み明かすことになったから、すごい。3人で飲んだ酒の量は半端ではないが、それ以上に注目すべきはそこでの3人の息詰まるような会話と神経戦。これを見事に演出

したキム・ジウン監督の冴えとソン・ガンホ、コン・ユ、イ・ビョンホンという3人の俳優の演技力に拍手すると共に、その緊張感はその各自の感覚でしっかりと味わってもらいたい。

近時の法科大学院から司法試験に合格した、人間の洞察力に欠如した弁護士なら、3人はそこで「ちゃんとした契約書を作っておくべきだ」などと馬鹿げたアドバイスをするかもしれないが、コトはそんな単純なレベルではない。チェサンは「人を見る目を持っている」と自信を見せていたが、さて、ジョンチュルはホントに二重スパイになることを承諾したの？ジョンチュルはチェサンに対して「警部になっても、公務員の給料なんて知れたものだ」と言っていたが、多分経済的な問題はこれ無関係。それは25歳以下の若手のために設けられた新たなポストिंग・システムの中で、大リーグに「二刀流」をひっ提げて挑戦する大谷翔平選手も同じだろう。ウジン最大の任務は、爆弾作りの外国人を含めた多数の人員と大量の爆弾を上海から京城に運び込むこと。もちろん、その後の爆弾による要人暗殺計画の実行も重要だが、そのためにはまず爆弾の運び込みを成功させることが大前提。さあ、その作戦の手順は？展開は・・・？

## ■□■爆弾の運搬は船？列車？密室内の攻防戦に注目！■□■

ジャッキー・チェンが「列車モノ・アクション」に挑戦した『レイルロード・タイガー』（16年）は反日、抗日映画ながら、コメディ色満載の楽しいエンタメ巨編だった（『シネマルーム40』172頁参照）。「列車モノ」の「密室モノ」としての面白さは、馮小剛（フォン・シャオガン）監督の『イノセントワールドー天下無賊ー』（04年）（『シネマルーム17』294頁参照）やポン・ジュノ監督の『スノーピアサー』（13年）（『シネマルーム32』234頁参照）等で実証されている。

しかして、本作後半からは、大量の爆弾を船で輸送するとの偽装を見事に成功させたウジンやゲスン達が列車内の三等席や一等席に分乗する姿が描かれる。列車は、このまま「義烈団御一行様」と共に上海から京城へ一路滑り込むだけ。そうなれば理想だが、ジョンチュルとハシモトのコンビも馬鹿ではないから、列車内を歩き回ってウジン達が乗り込んでいるのではないかと捜索の手を強めることに。さあ、この時点ではジョンチュルは日本警察の味方？それとも義烈団の二重スパイ・・・？ジョンチュル役を演じるソン・ガンホは韓国の主演俳優として初の累計観客動員数1億人を記録した名優。したがって、本作ではハングル語と日本語の両方を操りながら、二重スパイなのか否か自体を微妙に隠したまま、列車の中で複雑な動きを見せるので、それに注目！

来たる12月に公開されるアガサ・クリスティ原作の『オリエント急行殺人事件』（17年）は「列車モノ」の名作だが、そこでは密室内における殺人犯の追及がポイントになる。それと違って本作では、ジョンチュルとヒガシが連携して義烈団のメンバーが乗り込んでいないかを調べるだけだから、その仕事は簡単。一見そう考えられるが、ギリギリのところまでハシモトの側に立つジョンチュルの行動や、随所で見せるウジンの機転等々により、

列車内での緊張感が続いていくので、それに注目。そして、最後には食堂車で拳銃をぶっ放すドンパチの死闘につながるわけだが、さて、その勝者は？

## ■□■京城駅での一斉検挙は？爆弾のありかは？■□■

列車内という密室での駆け引きが本作後半最初の見どころなら、京城駅に到着した後の一斉検挙の網が次の見どころになる。ハシモトからの連絡を受けた日本警察は、総力を挙げて京城駅での一斉検挙態勢を敷いたから、これにて義烈団は一網打尽に！そして、爆弾もすべて押収されることに！そうなるしまえば映画はおしまいだから、結果は逆であることはわかっているが、それでも本作における京城駅での一斉検挙を巡る攻防戦は見どころいっぱい。

もっとも、銃を使った攻防戦には一定の犠牲がつきもの。日本警察が義烈団のメンバーであるか否かを判定するのはその顔写真だが、ゲスンは身元が割れておらず、氏素性はもちろん顔も分からなかったのでは・・・？本作導入部では、写真館の中でのウジンとゲスンとの淡い恋模様の中でシャッターが切れ、美しいゲスンの顔が印画紙の中に浮かび上がっていたが、ここに至ってはそれがアダになるので、ここではそんな布石にも注目したい。いずれにしてもウジンは何とか一斉検挙の網を逃げ延びたものの、ゲスンは顔写真がアダとなって逮捕。そして今、ヒガシの命令の下、そのゲスンからウジンの所在を聞き出す尋問（拷問）役はジョンチュルだ。既に顔には殴打の跡が、そして足の爪にはパンチの跡が顕著だが、そこでヒガシが命じたのは、美しいゲスンの頬へ焼きゴテを当てること。頑強に抵抗していたゲスンもこれには悲鳴を上げたが、知らないものを白状するのは所詮無理。しかし、ここでそんな弁解が通用するはずはないから、さあスクリーン上では・・・？

義烈団にそんな苦難が続く中、ある日とうとうウジンも逮捕され、ヒガシの手に落ちてしまったから、もはや万事休す。義烈団の計画は水の泡に・・・？スクリーン上ではこのようにゲスンもウジンも逮捕される姿が描かれるが、肝心の爆弾のありかは？そして今やヒガシの下で飼い犬のように働いているジョンチュルのハラの中は・・・？

## ■□■爆弾のセットは？その標的は？■□■

トム・クルーズがヒトラー暗殺の実行犯となるナチス将校役を演じた『ワルキューレ』（08年）（『シネマルーム22』115頁参照）も、『ヒトラー暗殺、13分の誤算』（15年）（『シネマルーム36』36頁参照）も、ヒトラーのすぐ近くにセットした爆弾の爆発には成功したものの、ちょっとした手違いのため、ヒトラーの暗殺はならなかった。それに対して、『暗殺』では見事に成功させた爆弾の爆発から標的の暗殺に向かう作戦が開始されたが、さて本作のハイライトとなる朝鮮総督府での爆弾のセットとその爆発の成否は？

本作は『暗殺』と違って、総督府内部の指揮命令系統がきちんと描かれておらず、日本警察の警務局局長に過ぎないヒガシ部長の存在感がやけに大きいのが少し不自然だが、こ

の際そんな些末なことは無視。『ワルキューレ』や『ヒトラー暗殺、13分の誤算』と同じように、標的の予定に合わせて爆弾をセットする手順や、それを手筈通り爆発させた後の攻撃と退却作戦の展開に注目したい。そして、本作ではそれを実行し指揮するジョンチュルの「勇姿」に最大限注目したい。

『暗殺』でもラストは法廷シーンとなり、1949年当時既に60歳を越えた主人公の一人が「裏切り者」として裁かれる姿が印象的だったが、そこまでに至る様々な権謀術策の様が出色だった。しかし本作でも、ゲスンには逮捕、拷問のあげく死体になってしまったし、ウジンも独房に入ったままだが、なぜか朝鮮総督府内の爆破事件を伝え聞いたウジンの顔には微笑みがある。それは一体なぜ？

## ■□■二重スパイは味方にも？それを前提とした次の作戦は？■□■

ジョンチュルの二重スパイらしき活動は既にバレており、列車による爆弾運搬情報が日本警察に流されたのは、義烈団の内部に日本警察の二重スパイがいたため？そう考えたウジンは列車の中で「ある策」を思いつき、見事に義烈団内の二重スパイを炙り出したが、この手の騙し合いはエンドレスに続くものだ。ウジンの逮捕は、「ある情報」を得たジョンチュルがそれをウジンに伝えたところ、「ある情報」の伝達自体が畏だったためだ。ウジンの逮捕に向けたそんな騙し合いの展開はスリル満点の面白さだが、もしそれ自体が想定範囲内だったとしたら・・・？つまり、ゲスンに続くウジンの逮捕によって、日本警察＝ヒガシ達に爆弾による要人暗殺計画はとん挫したと思わせる畏だったとしたら・・・？

『ワルキューレ』ではヒトラーの暗殺に最も縁がないと思われたナチス将校が実行犯になったが、本作で朝鮮総督府内に爆弾を運び込み、ヒガシ暗殺の実行犯になるのは一体誰？それはもちろん本作で二重スパイとなるジョンチュルだが、ジョンチュルとハシモトの連携が悪かったのに対し、ジョンチュルとウジンとの連携の素晴らしさはがラストに向けての大きなポイントだ。その根本に朝鮮人VS日本人の対立と対比される、朝鮮人同士の同胞としての思いや誇りがあったことは明らかだが、さて本作ではそれをどのように演出？

この手の映画は邦画での演出は絶対無理で、韓国映画特有のものだが、本作ではキム・ジウン監督の演出の見事さに拍手を送りたい。ちなみに、本作を『暗殺』とセットで見れば、より「あの時代」の「そんな問題」が一層よくわかるので、是非それをおすすめしたい。

2017（平成29）年11月24日記